

望ましいとする議論になってしまわないだろうか。

外発的発展の主張を回避するために重要なのは、掛谷・伊谷の議論のような、内発的発展を促すための「焦点特性」とする在来のものを中心に据え、それを補う外来のものを「創造的模倣」するという仕分けであろう。

実際、第 2 次研究会において高橋基樹は、「アフリカ潜在力」をめぐる評者からの質問に対して、アマルティア・センのケイパビリティ論の援用を検討していると回答した。アフリカの人びとが開発によってめざす状態（ウェル・ビーイング）とそのために必要な機能、その中でアフリカの人びとが選択できる機能（ケイパビリティ）とそうでない機能（それゆえ「潜在」している）を明示する分析になり、上記の仕分けをやりやすくするだろう。

あるいは上記のような、血縁・地縁などに基づく関係の範囲での「顕在」を、他民族や他国との間に拡張することの「空隙」の大きさを、「潜在」という言葉で強調しているのかもしれない。

#### 引用文献

Hyden, Goran. 1980. *Beyond Ujamaa in Tanzania: Underdevelopment and an Uncaptured Peasantry*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

掛谷 誠・伊谷樹一編. 2011. 『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会.

太田 至. 2016. 「刊行のことば」高橋基樹・大山修一編『開発と共生のはざま—国家と市場の変動を生きる』京都大学学術出版会.

高橋基樹・大山修一. 2016a. 「アフリカの変動、

そして開発と共生に向けた潜在力」高橋基樹・大山修一編『開発と共生のはざま—国家と市場の変動を生きる』京都大学学術出版会, 1-19.

\_\_\_\_\_. 2016b. 「開発と共生に向けたアフリカの潜在力とは」高橋基樹・大山修一編『開発と共生のはざま—国家と市場の変動を生きる』京都大学学術出版会, 401-422.

辻村英之. 2017. 『キリマンジャロの農家経済経営—貧困・開発とフェアトレード』昭和堂(近刊).

鶴田 格. 2007. 「モラル・エコノミー論からみたアフリカ農民経済—アフリカと東南アジアをめぐる農民論比較のこころみ」『アフリカ研究』70: 60.

\_\_\_\_\_. 2012. 「フェア・トレード商品の生産農家の多様性に関する一試論—地域間比較とサブシステムの視点から」『農林業問題研究』48(2): 138-143.

〈太田至総編集 アフリカ潜在力 4〉

重田眞義・伊谷樹一編. 『争わないための生業実践—生態資源と人びとの関わり』京都大学学術出版会, 2016 年, 360 p.

坂梨健太 \*

「何と平和で安全か。」本書の帯の言葉である。アフリカの地域社会は、人口増加や自然環境の劣化に伴って争いが絶えないというイメージをもたれるかもしれないが、それを覆すことに本書は成功している。冒頭の言葉は 70 年代にアフリカで調査をおこなった嘉田由紀子（前滋賀県知事）から寄せられた。つまり、農村調査で抱いた彼女自身の感慨が正しかったと、長い年月が経っても確信を抱か

\* 龍谷大学農学部

せるほど、自然と人間の関係の奥深さを知らしめる本だといえよう。

アフリカにおける人と自然の関係にかんする議論は、生態人類学や農学を中心に展開されてきた。主な目的は、過酷な自然環境（砂漠、サバナ、熱帯林など）で、人びとがいかに生活を営んできたのかを明らかにすることであった。今日では、それらの研究を参考にしつつも、政治経済、文化、人権、医療、教育など、多種多様なテーマの方が活発になっているようである。では、アフリカにおける自然環境と人の関わりにかんする研究は下火になったのか。本書の各章を読むと、決してそんなことはないと思わせてくれる。

本書では、アフリカ農村の生態環境や人びとの生業に影響を与えてきた要素として、1) 農耕と牧畜の土地競合、2) 経済状況の変化、3) 人と植生の関係性、に着目して、それぞれの事項に応じて、第1部「外部社会との接触」、第2部「生業構造の変化」、第3部「生態資源と生業」に構成されている。そして、本書のタイトルが示すとおり、人と自然、人と人の関係が再編されるなかで、どのようにして資源をめぐる「争わない」のか、その過程をアフリカ地域社会がもつ共生の潜在力と指図して、分析される。

序章と終章をのぞき、1章から10章まで、比較的若い研究者が執筆の中心となっており、私も大変刺激を受けた。たとえば、8章では、近年話題になっているドローンを使っている。ドローンで撮影した村周辺の生態景観は壮観である。今後、土地利用や森林破壊の現状を詳細に知るためには不可欠なテクノ

ロジーとなるのではないか。もちろん新しい技術を取り入れた点が本書の強みであるわけではない。本書の強みは、粘り強いフィールドワークに基づいた詳細なデータを示していることである。

簡単に各章を紹介しよう。

1章と2章は、タンザニアにおいて、農耕もおこなっている牧畜民スクマと、かれらの移住先で農耕を続けてきた地元住民の関係を扱っている。1章では、スクマが移住先で食料不足に陥った農民に仕事を提供するなどして、救済する事例が描かれている。日常的に対話可能な親密な関係を地元住民と構築し、「微妙な社会的・地理的な距離感」を保つことで、争いを予防するのだ。2章では、家畜の食害などが要因となって対立が起こった場合、スクマがもつ「多彩な技術やホスピタリティ」を駆使しながら共生関係が修復される過程が示される。自然保護政策による土地収奪といった共通の課題が立ちあらわれることで、スクマも地元住民も問題を共有し、民族関係が改善する事例が紹介されている。

3章はガーナのカカオ畑に植えられているコーラナッツの取引について議論されている。カカオ畑で採集されたコーラナッツがナイジェリアやニジェールへいかにして流通していくか。詳細な調査は特筆すべきである。現地買付人から販売人にいたるまで、多様な民族が、それぞれの信頼する相手とのネットワークを張り巡らしてビジネスを展開している。まさしく「民族交流の歴史」である。ガーナのカカオ生産のみが北部の人びとをひきつけるわけではないことを教えてくれる。

4 章ではタンザニアの農村社会で対話や交渉によって土地不足に起因する対立を回避する事例が紹介されている。貧しい人を優先した土地分配が村人を納得させる。お互いが共通の生業をしてきた経験をもつことで、他者への共感が生まれるからだろう。それ以外の土地不足の対応として、外部の技術やモノを取り入れることで、農業の集約化を促し、農耕に適さなかったところを農地に変えていく動きもみられる。それによって環境の劣化が進むのか、さらに人びとが環境の変化にどのような対応をとるのか興味をそそられる。

5 章は、バナナが生計の中心にあるウガンダ中部のガンダの社会の柔軟性について論じている。バナナがあるからこそ多様な作物を受け入れることが可能であるという。近年では、親族の葬式の際に提供するバナナを求めて、女性の互助組織の形成が活発になっている。バナナを求める人びとの執念には恐れ入る。

6 章の事例地であるタンザニア南部の高原地域では、国内の木材需要の高まりから、マツの植林が広がっている。この地域では、土地の疲弊や肥料価格の高騰に対応するため、樹木を植えて土地の機能を回復させつつ、焼畑で作物をつくる「造林焼畑」がおこなわれてきた。人びとが林を再生・管理する技術とともに火を使う技術の習得を学んでいった過程は興味深い。今日では大規模な林業家を誕生させる一方で、経済格差の拡大の可能性をもつようになっている。大規模林業家は、雇用の創出、地域内の作物や酒の購入などをおして地域社会へ還元しようとしており、その点は 1 章の富者スクマの例と共通する。

このような生業構造の変化による格差の拡大が、アフリカ農村社会でどの程度許容されるのかという問いは、本書の底流にあるテーマであろう。7 章は、アフリカの農村社会の特徴として知られる平準化機構が見出された、ザンビアのベンバの事例である。ベンバの社会でも、環境の変化によって十分な食料を得られない人びとが始めている。そのため裕福な人びとが提供するピースワーク（出来高払いの賃労働）は貴重である。おもしろいのは、ピースワークを終えた労働者に強い発言権があり、雇い主との対等な関係性が担保されることである。また雇い主は特定の人を雇おうとしない。特定の人物だけが恩恵を受ける事態を避けるのは、平準化機構の駆動力となっている人びとの妬みが意識されているからだ。しかし、ピースワークによって雇い主は経営規模を拡大できるため、格差は広がっていく。格差はどこまで社会のなかで許容できるのかという問いは今後ますます注視すべき課題として認識される。

格差の原因となる環境の劣化を食い止める取り組みについて、第 3 部の 3 つの章が参考になる。8 章では、耕地内にある林を「農地林」（人と生態環境との関係が創り出す地域固有の景観）とよび、その農地林を特徴づける落葉高木マラルの利用について議論されている。マラルの果汁からできる酒は伝統的指導者に貢ぐ必要があり、伐採も禁止されていた。土地が私有化された近年もマラルは残され、近隣世帯の関係維持のためにマラル酒が使われる。世帯間で樹木数に差があっても、マラルの争奪はみられない。非

木材林産物が単に経済的な資源としてだけでなく、長らく社会的価値を有してきた示唆に富む事例である。

9章では、熱帯林における焼畑農耕が必ずしも森林を破壊するわけではないことを、カメルーン東部の事例が教えてくれる。ここでは、人間と生物が同じ場所で共存できる環境として「ランド・シェアリング」という概念に注目し、ネガティブにみられてきた熱帯の焼畑を肯定的に捉え直している。旺盛な植生回復を認識しながら焼畑を形成する人びとが「経年的な青写真を描ける」という、人と熱帯林の共生にあてた執筆者の表現に思わず膝を打ってしまう。

10章では、農民自らが小型水力発電を導入し、その過程で芽生えてきた環境保全の動きについて分析している。独自に水力発電を学ぶ革新者がいたことに加えて、地域社会内で水力発電の必要性が認識され、一気に水源保全に動く。この展開の早さには目を見張らせる。自然エネルギーを活用した分散型/地産地消型エネルギー社会の構築は世界の課題と捉えられているが、本事例はまさにその最先端として位置づけられる。

各章で提示された、人と人、人と自然の関係は、「お互いの存在が相手の価値を高める共生関係」であり、「格差社会がもたらす不寛容な関係とはほど遠い」と終章で指摘される。さらに、そのような関係は、お互いに何かをする、または、何もしないこと（そのようにみせること）によって、結果的に争わないことにつながるという。ここにアフリカ農村社会の潜在力が見出されている。

若干の論点を指摘しておこう。新しい生態・社会環境にたいする人びとの対応の過程を明らかにすることとおして、アフリカの潜在力を見出すことが本書のテーマであった。ただ、何をもって新しい環境なのか、定義するのはなかなか難しいように感じられた。外部社会との接触、土地問題、環境の劣化、生業の変容、格差の問題などは、時間軸を長くしてみると、新しいものではないようにも思う。実際、いくつかの章では植民地時代の影響が読み取れる。国境を越えた移民や外国資本の影響など、近年話題になっている「新しい」変化にたいする人びとの応答がどのようなものか、本書で示された潜在力が発揮されるのかどうか気になるところである。

また、格差問題を扱うことは重要なテーマであり続ける。ただし、富裕層と貧困層だけでなく、中間層の形成やかれらの地域内での立ち位置も考える必要があるだろう。

本書では、人びとの対応に、「巧妙なつきあい」、「多様化」、「柔軟性」などといった言葉があてられる。そのような言葉を用いることで、アフリカ社会が何にでも対応できるという結論を導く誘惑にかられてしまうかもしれない。しかし、本書は共生関係の構築と維持にかんする過程を重視し、人びとの変化への対応について詳細なデータを示したことで、そのような一枚岩的な見方の形成を食い止めている。今後も続けられるであろう、地に足のついた定点観測が、アフリカを狭い見方へ押し込むことなく、生態・社会環境の変容を考えるための重要な視点を与えてくれるはずだ。